

生活文化産業学

(第1・3木曜日 午後14時～／成徳学舎)

2011年度後期 第3回 ケーススタディ1／テレワークと在宅勤務のすすめ

担当:田上 睦深、大倉 朗寛

～講義の流れ～

1. 株式会社オフィスエム 代表取締役 田上睦深さんによる講義(14:00～/60分)
2. ワークスタイル(働き方)比較について(15:00～/20分)
3. 生活文化産業を形成するワークスタイルについて(15:20～/20分)
4. 【情報共有】テレワーク、在宅勤務、SOHO、アウトソーシング(15:40～/10分)
5. ディスカッション、まとめ(15:50～/10分)

～内容～

1. 株式会社オフィスエム 代表取締役 田上睦深さんによる講義(14:00～/60分)
テーマ 「在宅勤務のための講座」
※内容は5～8ページ目を参照してください。
2. ワークスタイル(働き方)比較について(15:00～/20分)
 - ・生活文化産業を形成する3種のワークスタイル
 1. 出勤勤務型
 2. 在宅勤務型
 3. テレワーク型 (→ノマドワーク型)
 - ・7つの比較項目
 1. 空間的視点
 2. 時間的視点
 3. 労働生産性
 4. ITスキル
 5. 情報収集
 6. 想定されるケース
 7. 生活文化産業との関わり

生活文化産業を形成する過程において、都市部に集中（余剰）した労働力を、いかにして各地域の労働力として取り込んで地域振興につなげられるかが重要となる。たとえば、ワークスタイル（働き方）を「出勤勤務型」と「在宅勤務型」、「テレワーク型」に分けて比較し、相互関連が把握できれば、各ワークスタイルにおける今後の進展が見えてくる。

まず、空間的視点で比較すると、一定時間、たとえば職場など特定の空間に束縛される「出勤勤務型」に対して、「在宅勤務型」は出勤するために外出する必要がない分、自宅が「仕事」と「生活」が混同する場となって、結局は自宅内で部屋や環境を変えるなど、自分の中でスイッチを切り替える取り組みが必要となるケースがある。それらに対して、「テレワーク型」は、いつでもどこでも仕事ができる分、逆に、活動拠点となる場を見つける必要が出てきて、実際のところ全て「いつでもどこでも」ということにはならない。最近では、特定の活動拠点を持たないノマド（放牧民という意味の言葉）ワークというワークスタイルも登場して、テレワークよりも、さらに行動範囲が広がることで農村部や中山間地域への滞在による経済効果が期待される。

次に、時間的視点で比較すると、勤務時間以外であれば時間を自由に使える「出勤勤務型」に対して、「在宅勤務型」と「テレワーク型」は通勤に費やす時間を労働時間に費やしたり、自由に使えるという利点がある。その上で、労働生産性という視点から比較すると、職場など特定の空間に集まって作業することにより生産性が高まる「出勤勤務型」に対して、「在宅勤務型」は、自分が担当する作業が分離されているため、前後の工程や全工程が見えにくくなり、生産性が高められる範囲は限られる。

I Tスキルに関しては、「出勤勤務型」では所属する業種によって異なり、I Tスキルが不要な業種もあると考えられ、「在宅勤務型」では取引先との連絡のためのメールや携帯が使えることが必須で、「テレワーク型」ではI Tに関することは自ら調べて自ら解決できる、文字通り高度で自立したI Tスキルが必須となり、特にメールや携帯電話、ホームページ、ブログ更新などが重要となる。情報収集に関しては、出勤の途中や出勤中あるいは帰宅時に様々な情報が入手できる「出勤勤務型」に対して、「在宅勤務型」では自宅内にいることから、テレビやラジオを介して作業しながら自ら情報収集に働きかけることが重要となり、「テレワーク型」はI Tを有効活用して時間的に効率よく情報収集することが重要となる。

最後に、生活文化産業との関わりについて、「出勤勤務型」では、企業など職場内で活動する時間が長く、職場内での関わりが重視されることから、職場外（地域コミュニティ等）との関わりが希薄になる傾向があると考えられるが、その分、自分や自分が尊敬する偉人の生まれ故郷や第2の故郷にしたい地域の生活文化には強い関心をもつものと考えられる。「在宅勤務型」では、自宅内で活動する時間が長くなるため、自宅内で行われる生活文化作業（家事、育児、介護など）について、より多くの時間を費やせるが、その一方で、他の地域において自分に関連する生活文化については、関心があるものと考えられる。「テレワーク型」では、活動する場所や時間が一定しないため、特定の地域や時間帯で行われる生活文化を持続的に担うことには適さないが、その担い手をサポートすることはできる。

3. 生活文化産業を形成するワークスタイルについて（15：20～/20分）

生活文化産業を形成するためには、「出勤勤務型」と「在宅勤務型」、「テレワーク型」という3種のワークスタイルで働く人同志がネットワークを形成して情報共有し、相互に連携を図りながら、それぞれの長所を活かし、短所を補い合い、相互の立場から理解し合うことによって、労働生産性を高めて創造的に自立してゆくことが求められる。

その中で、「テレワーク型」という働き方は、「出勤勤務型」と「在宅勤務型」で働く人同志をつなぐ役割を担うワークスタイルとして特に注目される。その理由としては、いつでもどこでも仕事ができる「テレワーク型」という働き方を実践している、いわゆるテレワーカーの情報収集力と情報発信力、そして労働力が、特に、人手不足が深刻な農村部や中山間地域で必要とされている点が挙げられる。各地域において多様な生活文化の価値や魅力が、他の地域から訪れたテレワーカーの視点により新たに発掘（発見）され、それらに関する情報が、メールやソーシャルメディア、ホームページ、ブログなどを通じて発信されるだけでなく、実際に農村部や中山間地域の労働力として大いに期待されている。

さらに、「テレワーク型」は「ノマドワーク型」として発展している。「ノマドワーク型」という働き方を実践している、いわゆるノマドワーカーは、特定の活動拠点を持たずに、居心地のよい各地域を転々とし、それぞれの地域で必要なものは、それぞれの地域で買い揃えようとする傾向があるものと思われる。特に、衣食住という生活文化については地産地消型で消費活動を行い、それと同時に各地域に在住しないと知り得ない、いわゆる地元ローカル情報を入手し、ITスキルを存分に活用して情報発信してくれるであろう。

従って、農村部や中山間地域では、ITインフラを整備するだけでなく、いつでもどこでも仕事ができるような生活環境を整備しておくような政策をすすめることができれば、ノマドワーカーを呼び込み、地域からの情報発信力を強化することにつながる。

ところで、生活文化産業を形成する視点としては、大きく2つに分けることができる。1つ目は、身近にある生活文化、あるいは生活文化に関連する技術や商品に対して、生活文化のベースとなっている有形または無形の地域資源と関連付けることにより価値や魅力を付加し、その地域で生産しなければ価値や魅力が付加されない独自の高付加価値商品として生産し、販売するといった視点と捉えられる。そして、2つ目は、市民一人ひとりの生活文化の質を向上することを目指した仕事（働き方）や、生活を実現するために必要な技術や商品、知識を獲得して有効活用するといった視点と捉えられる。

「テレワーク型」というワークスタイルは、「出勤勤務型」と「在宅勤務型」との双方のメリットを取り入れながら、空間と時間の自由度を高め、生活文化の質の向上を目指して「ノマドワーク型」として進化し、生活文化の価値や魅力を創出し続ける各地域を訪ねてゆく。その一方で、地域内でネットワークやコミュニティを形成して、各専門分野の知識を持ち寄り、相互学習によって、生活文化の価値や魅力を創出し続けようと努力している地域では、地域内需要を生み出して地域を活性化しながら、ノマドワーカーという地域外需要を呼び込むという、地域振興における新たな相乗効果が生まれつつある。

4. 【情報共有】テレワーク、在宅勤務、SOHO、アウトソーシング（15：40～／10分）

- ・ [生活文化産業学 | 市民大学院（文化政策・まちづくり大学校）](http://bunka-seisaku.org/sbsg2011.html)
<http://bunka-seisaku.org/sbsg2011.html>

5. ディスカッション、まとめ（15：50～／10分）